

震災を体験した小学校高学年の子どもの心理

Psychology of Elementary School Children who Have Experienced Earthquakes

小林 朋子

Tomoko KOBAYASHI

（平成19年10月1日受理）

Abstract

In this study, we researched the composition of nineteen 5th and 6th grade elementary school children who had experienced the Niigata Chuetsu earthquake. We studied the psychology of children who had experienced this earthquake. The results revealed that the children had received support from their family, community persons, and friends. Therefore, we must hasten the recovery of schools as far as possible in order to provide additional support to children. In addition, the children expressed a desire to help people in a similar situation because they too had experienced the terror related to an earthquake. Further, they wanted to expand their desire to help people in the future. It was also observed that these children took into account the future and developed a healthy inner strength that would help them overcome any kind of difficult experience. In other words, it was evident that all these children did not suffer from posttraumatic stress disorder (PTSD) even after they had experienced the earthquake.

キーワード： 災害、児童、心のケア

1. 問題と目的

災害は、これまでの日常生活が根底から覆される出来事である。こうした災害を通じた体験を人がどのように捉えるかについては、自然災害の場合には比較的“誰にも起こること”“偶然”としてあきらめるといった傾向が強く、特に日本の文化としてあきらめが強いという指摘がある（廣井,1995）。また、1995年に発生した阪神淡路大震災において被災した人の心理を調べた日下・中村・山田・乾原（1997）は、被災した人に、恐怖・怒り・無気力感・不安・生き残った者の幸福感とうしろめたさ・被害の少なかった者のうしろめたさ・遺棄感・悲しみ・自責感・開き直りなど、様々な感情が見られたことを明らかにしている。

さらに、子どもの心理についても明らかにされている。藤森・林・藤森（1994）は、子どもの災害によるトラウマは、大人とは異なる形で表出されることを指摘している。特に子どもの場合、心的外傷後ストレス障害（以下、PTSDと略す）は、1）睡眠障害、2）親への分離不安、3）恐怖、4）行動障害、5）自己についての懐疑、などが見られるとしている。また、子どもたちには災害による喪失に対して典型的な悲嘆と哀悼のパターンどおりに反応することもあれば、また自らの不安定さと自分に対する他者の反応のために、情動の解除が抑制されたり、哀悼という精神過程が阻止されたりして、パターンどおりに反応しないことも多いことなどがわかっている（Raphael,1989）。藤森・藤森・山本（1996）

は、子どもの悲嘆は年齢や発達段階によって大きく異なるとし、小学校4～6年になると、大人の期待に応えようとする気持ちが強く、自分の悩みや心配事を外部に表現することを躊躇するように思われると述べている。つまり、災害時の心のケアを考える際に、子どもの発達段階に応じたケアが必要であることがわかる。

これまでの災害時における子どもの心理に関する研究では、質問紙調査などを用いて災害時に表れる子どもの症状や行動について明らかにされているが、子どもの視点から災害をどのように捉えているのかについて明らかにした研究はない。子どものケアを考える際に、子どもたちが災害という体験をどのように捉えていたかについて、子どもの視点に立ちその心理について理解する必要があるだろう。

そこで本研究では、子どもが書いた地震体験に関する作文を分析することによって、子どもの視点から災害を通した子どもの気持ちについて明らかにし、そこから子どもへの支援のポイントを探ることを目的とする。

2. 方法

(1) 分析対象

分析は、2005年に石油化学新聞社が出版した『中越地震体験文集』に掲載された作文を用いた。この文集は、石油化学新聞社が中越地震発生の約2ヵ月後、新潟県中越地域の教育委員会の協力を得て、被災した小中学生が書いた作文をまとめたものである。今回の分析の対象とした作文は、中越地震発生当時、A市内の小学校に通っていた5～6年19名（男9名、女10名）が書いた作文である。作文の選択基準は、①性別、②震源からの距離、③学校の立地位置の3点とした。「震源地からの距離」を選択基準に選んだ理由として、神藤・野上・住友・齊藤・佐藤・吉田・柳原・山本・森田・寺村・坂口・田中・舛井・松田・山口・二宮・宅（1997）の研究で、被災の程度でストレス反応が違ってくることが指摘されている。そこで、同じA市内で被災していても震源地からの距離により被害の程度が異なり、その後の避難生活が変わってくる可能性が考えられたため、震源地からの距離が異なる児童を選ぶようにした。次に、「学校の位置」に関しては、住友・野上・齊藤・佐藤・吉田・清水・柳原・山本・森田・寺村・坂口・田中・神藤・舛井・松田・山口・二宮・宅（1997）が被災による心理的影響は地域的状況やその後によって異なることを明らかにしており、同じA市内でも地区によって住民同士の結びつきの強さや、避難生活の状況が違う可能性が考えられた。よって、A市役所から学校までの距離を「学校の位置」とし、選択基準の1つとした。さらに、Raphael（1989）は、震災後の子どもの反応における性別の違いを示唆している。よって、被災後の行動において、性別による違いが考えられたため、「性別」も選択基準に加えた。

(2) 分析対象となる地域の概要

A市は川に沿って形成された街であり、市内を通る国道も川に平行してつくられている。A市内の小学校は国道のそばに多く、地域の結びつきの面から見ると、比較的結びつきの強い地域だといえる。対象とした児童の出身小学校は中規模校5校と小規模校1校であった。

またA市は中越地震において最大震度6強を記録し、A市全域に出されていた避難勧告が解除されたのは2004年10月31日だった。またA市内小中学校計23校が授業を再開したのは2004年11月4日からだった。A市の被災状況は、人的被害は死者9人、重傷70人、軽傷522人であり、住宅被害は全壊107棟、大規模半壊と半壊1,116棟、一部損壊13,733棟であった。

(3) 分析の手続き

分析は、小林（2006）を参考にKJ法により分類し、それらを時系列に並べた。分類したカテゴリー

の関係図は、大学教官1名と教育相談学を専攻する大学生（5名）で検討を行った。

3. 結果

(1) 分析対象

「性別」「震源からの距離」「学校の規模」などを考慮し、19名の作文を分析した（Table 1）。

(2) 分類されたカテゴリーについて

1) 地震発生時

地震発生時の子どもの行動や心理について分析を行った。その結果、「テーブルの下に入ろうとしたらテーブルが低くて下に入れなくて、かくれる場所がなくて、その場にしゃがみこむことしかできなかった」「ふとんをかぶっていました」「もうこれがおさまったら外に出よう。」大声で言った」「ケイタイ電話で、足元を照らしながら、外に急いで出た」など地震が発生したときに、子どもがどうにかしようとして取った行動について書かれている文を<地震発生時の子どもの対処行動>とカテゴライズした。さらに、「パニック状態だった」「一瞬何がおこったのかわからなくなりました」「すごくぼくはあわてていた」など地震が発生したときの子どもの動揺が表れていた文をまとめたカテゴリーには<恐怖・動揺>とつけた。

Table 1 分析した児童の概要

学年	性別	震源地からの距離	学校の位置	人数
5年	女	25km 以上	1.5~5 km	2名
5年	男	15~20km	5km 以上	2名
5年	女	15~20km	5km 以上	3名
6年	男	15~20km	5km 以上	2名
6年	女	15~20km	5km 以上	1名
5年	男	20~25km	1.5km 以内	1名
5年	女	20~25km	1.5km 以内	1名
6年	男	20~25km	1.5km 以内	2名
6年	女	20~25km	1.5km 以内	1名
5年	男	20~25km	1.5~5 km	1名
5年	女	20~25km	1.5~5 km	1名
6年	男	20~25km	1.5~5 km	1名
6年	女	20~25km	1.5~5 km	1名

※学校の位置はA市役所からの距離

2) 地震発生直後

地震発生直後から避難所に行くまでの子どもの行動や心理について分析を行った。

「泣きたくて、泣きたくてしかたがないのに、なぜか泣けなかった」「パニック状態で、何が起きているのかわからない状態だった」「私は、大きな揺れと、またいつ来るかわからない恐怖でいっぱいでした」などは地震によって恐怖を感じたときの様子が読み取れる文であったため、カテゴリーを<余震への恐怖・不安>とした。一方で、「たびたび来る余震は、ほとんど気がつかないくらいになっていた」「その日に地震が来たらしいけど、少しも気がつきませんでした」「その後、私たちの話題から地震という言葉が消えた」などは、地震を体験したがそれが平気になっていったことが読み取れる文であったため、<地震への慣れ>とした。

「地震があったことは、何時間たっても夢のようだった」「農協で一晩明かすのか」「今ここで、何が起きているのか理解できませんでした」などは、地震が起きた現実には直面できない子どもの気持ちについて書かれている作文だったので、カテゴリーを<現実への非直面化>とした。「少し安心した」など子どもの気持ちについて書いてある作文を<安全な状況下での安心感>とつけた。

3) 2日目以降

2日目以降の子どもの行動や心理について分析を行った。

「その日からかたづけを始めました」「ぼくは反対しました」のように避難中の子どもの行動に関わっているのが、<避難生活中の子どもの行動>とした。

子どもの心理についてもいくつかのカテゴリーが見出された。「私は、大きな揺れと、またいつ来るかわからない恐怖でいっぱいでした」「家の中がこわい」「こわくて、寒くてなかなか眠れませんでした」には<余震への恐怖・不安>とした。「でも意外と楽しかったです」「みんないればこわくありません」と、友人と一緒に過ごせることに楽しさを感じていた子どものたちの気持ちについて書かれた文には、<友だちといられる楽しさ>とした。さらに、「みんなそろってよかったです」「家族がそろったのでちょっと心強くなりました」など家族といることによる安心感については、<家族と一緒にいられる安心感>とした。

「もしそれが平日だったら私一人だったのでパニックだったと思う」のように中越地震が発生した状況が違っていたらこうなっていたらという内容が書かれていた文に<仮定と結論>、「私は幸せだったと思います」という風にもしと今を比べての気持ちについて書いてあった作文を<気持ち>のカテゴリーにまとめた。<仮定と結論><気持ち>は、どちらも実際の状況と違っていたらという気持ちが表れていたため、<もし違っていたら>というカテゴリーとしてまとめた。

「ぼくは、このような怖い体験をした」など地震が起こったことに対して否定的な評価をしていた文に<否定的評価>、「私なりに、とっても良い経験をしたなあと思いました」など地震を体験したことに対して肯定的な評価をしていた文に<肯定的評価>、「自分が本当に生きているのが不思議に思うほどの大地震でした」など地震に遭って不思議な感じを感じている作文に<不思議>、「この地震は決して忘れてはいけません」など地震が起こったことを忘れないと書かれていた文に<忘れない>、「一日も早く世界中の人々が、安心して幸せにくらしていけるといいなと思います」というふうに、地震に遇ったあとだから願ったことについて書かれていた文を<願い>とした。<否定的評価><肯定的評価><不思議><忘れない><願い>は、すべて地震を体験したことによって感じた気持ちであったため、<地震を体験して思ったこと>としてまとめた。

「車の中や避難所で生活し、近所の人やボランティアの人からもいろいろ助けてもらいました」など周囲の大人や他の人からしてもらったことについて書かれている文や、「大人の人たちが大変な中、作

ってくれてうれしかったです」「救援物資を送ってくれた皆様、本当にありがとうございました」など、救援物資や大人からの支援に対して感じた気持ちについて書かれた文を<支援への感謝の気持ち>とカテゴリー名をつけた。

4) 地震体験を通して子どもが考えたことについて

「人は一人じゃ生きていけない」など地震に遇ったことによって学んだことについて書かれている作文に<学んだこと>とつけた。「大きな地震がきてもこのことを生かしてくらしていきたいです」など今後していきたいことについて書かれた文に<今後したいこと>、「私は、将来、人の役に立つ仕事がしたいです」など地震によってこんな風になりたいと感じたことについて書かれていた文に<今後になりたいこと>とつけた。<今後したいこと><今後になりたいこと>は、今後こうしたい・こうになりたいという希望について書かれてある内容だったので、<今後したいこと・なりたいたいこと>としてまとめた。「衛生状態が悪くなって破傷風という病気になる人がいることを知ったので破傷風のワクチンを買うために全校に募金を呼びかけました」は子どもの中であった思いを実際に行動に移したことが書いてあった文であったため<支援活動を実際に行動>とした。

4. 考察

小学校高学年の児童たちの震災に遭ってからの心理プロセスについて、「支えになったもの」「支援に対する気持ち」「地震のとらえ方」「注意すべき点」の点から考察してみる。

(1) 子どもたちの支えになったもの

子どもたちの支えになったものとして、まず「家族」を挙げることができる。「お父さんと会えるまでは、とても不安でした」というように家族の誰かがいないことに不安を感じ、「家族がそろったので心強くなりました」「みんなそろってよかったです」というふうに家族といることが子どもに安心を与えている。Raphael (1989) は、「ほとんどの家族はその構成員が生き残り、家族全体の地位が無事だったことに大きな安心感をもつことになろう。もし家族の誰かが不在の場合には、その生存と安全を確保することが何よりの関心事になり、それが確認されるまでは感情の喚起と積極的な探索が続くだろう」と述べている。今回の結果でも、家族や地域の人の行動が子どもの行動や思考に影響を与えていたことはFig.1のモデル図からわかる。Raphael (1989) や藤森ら (1994) も被災後の心のケアにおける、親や家族の存在の大切さを指摘しており、本研究で作成されたモデルからも親や家族の存在は子どもたちに大きな影響を与え、支えとなっていたことが確認された。それだけでなく、「車の中や避難所で生活し、近所の人やボランティアの人からもいろいろ助けてもらいました」「もしも地震があったとき、知っている人が一人もいなかったら、友達も近所の人もいなかったら」の記述から、地域に住む人の存在も子どもたちの心の安定に影響を与えていたことがわかる。顔馴染み、近所の人、教師など地域の人の存在は子どもたちに安堵をもたらしたといえる。

また友達の存在も安心感を与えていた。「みんないればこわくありません」「友達とゲームや、かんけりや、カードゲームをしたのがたのしかったです」、ひさしぶりに学校へ行き、友達と遊んだ時には「地しんがきたらしいけど、少しも気づきませんでした」という記述があった。震災後において友達の存在が子どもたちの心に影響を与えるという結果は、阪神・淡路大震災でも指摘されていた。山崎・加藤・吉田・河合・成田・渥美・平野 (1996) が、阪神・淡路大震災の震災1ヶ月後に被災した小学生6年生 (112人) を対象にしたアンケート調査によると、震災で一番つらかったことは、友だちが死んだ、家族が死んだ、友だちに会えなかった、食事がまずい、家が壊れて帰らない、風呂に入れなかった、だった。一番うれしかったことは、学校で友達と会えた、自分や家族が無事だった、電気・ガス・水道の

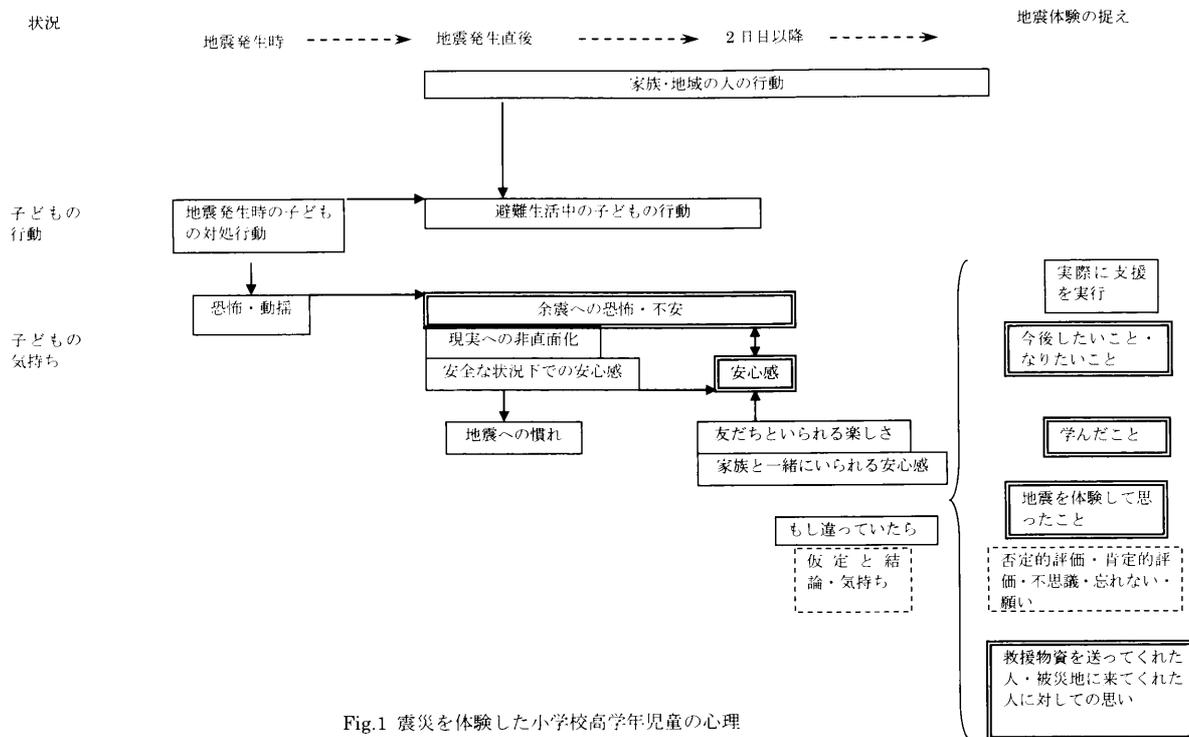


Fig.1 震災を体験した小学校高学年児童の心理

復旧、おいしいものを食べた、風呂の入った、全国から物資が届いた、ボランティアが親切、自宅が無事だった、ことを明らかにしている。このように、友達に関することが上位にきている。藤森 (1996) は小学生からは友達の存在が非常に大切になると述べているが、本研究からも同時に友達の存在が心の支えとなっていると示された。

いつもと変わらない日常も地震から立ち直る支えになると考えられる。「もう一つは家にすめるようになったときです。あのときはうれしかった」「うれしかったことは、車庫にいる時、電気が使えるようになってテレビが見れたり、ゲームがじゅう電できるようになったことです」など、震災前と変わらない日常も子どもたちが震災から回復する助けになっていた。さらに、「よしんが続いたので、こわくてねむれない時もあって不安がいっぱいになったけどだんだんちょっとずつ不安が消えていきました」とあり、余震が減少していくことも日常を取り戻していくきっかけとなっていた。Raphael (1989) は通学など日常の生活が停止することが、何か特別な感じを与えるだろうと述べている。同様に富永 (2004) も日常生活の回復には、通常の授業への復帰が大切と指摘している。つまり、学校が再開することが子どもたちにとって心の支えになる友達に会ったり、震災前と変わらない日常を実感することができていたりすると考えられる。つまり、子どもたちの心のケアを考える際には、個別のケアよりもまずは学校を再開させることが最も効果的であると言えよう。

(2) 支援に対する気持ち

2日目に救援物資であるおにぎりが配られたとき、救援物資に対する評価は2通り (おいしい、まずい) であった。おいしいと思った子どもに配られた救援物資は、身近な大人が大変な思いをして作ってくれたものであり、まずいと感じた子どもに配られたものは、作り手・運び手・送り手の見えないものだった。地震発生直後においては、実際に身近な人が大変な思いをしているということが目にみえることで、大変さを実感する。だからこそ、救援物資のありがたみが増すのだろう。一方、作り手・運び

手・送り手が見えないときには、救援物資に対するありがたみが薄れてしまうのだろう。それらがおにぎりに対するおいしい・まずいという気持ちにつながったと考えられる。

その後時間が経ち、その間に多くの人から救援物資をもらい、多くの人がボランティアとして駆けつけてくれた。そして、4ヵ月後には救援物資を送ってくれた人や被災地に来てくれた人に対する思いは、感謝している・大切な人・優しい人という肯定的なものが挙げられている。4ヵ月後に救援物資を送ってくれた人・被災地に来てくれた人に対する評価が肯定的なのは、時間が経つにつれ、子どもの視野が広がったと考えられる。「地震があったことは、ゆめのようなだった」からわかるとおり、子どもたちは、自分の置かれている状況を理解することに精一杯で、周りの状況にまで目を向ける余裕がなかった。しかし、避難生活中になると、「支援物資が送られてくるようになり、改めて人の大切さを学びました」と周りの状況へも目が向けられていた。避難生活を送りながら、子どもたちは大人たちやボランティアの人など、様々な人の行動を見て、実際に行動し、いろいろと考えた。その間に物事を客観的に見れるようになっていったと考えられる。2004年12月5日の朝日新聞によると、小学生が書いた日記の内容は「最初は『つらい』『大変』などだったが『ボランティアをやった』『ワークショップの活動が楽しかった』にかわってきた。地震当日の恐怖心や避難生活の様子を客観的につづる児童も出てきた」という。時間が経つにつれ、周りの状況へ目を向ける余裕ができ、物事を客観的に見ることができるようになったことが、子どもたちの救援物資を送ってくれた人や被災地にきてくれた人に対する肯定的評価へとつながったと考えられる。

(3) 地震の捉え方

本研究では震災から4ヵ月を経た子どもたちは地震を経験したことに対して、否定的評価、肯定的評価、その2つに含めることのできない、不思議さ、忘れない、願いという気持ちをもっていたことがわかった。例えば、地震を肯定的に捉えていた子どもは、避難生活中に何か良い思い出を作ったり、地震に遭ったからこそ経験できたことを経験したり、地震の意味を自分なりに捉えられていた。さらに地震に遭ったことを否定的に評価していた子どもも地震から何かを学んでいた。否定的に評価していた子どもたちは特に、地震に遭ったことで地震の怖さ、日常が壊れるということを経験し、地震に対する備えをしておきたいという気持ちが高まっていた。これは、子どもたちは地震に遭うことで今まで気付かなかったことや当たり前だと思っていたことが当たり前でないことに気付いたためであると考えられる。

また今まで他人事だった地震を経験することで地震が身近なものになり、その恐ろしさ、恐さを知ったからこそ、同じような状況に置かれた人たちを助けてあげたいという気持ちが生まれた。自分たちが救援物資を送ってもらったり、復旧を手伝ってもらうことで感謝の気持ちを持ち、さらにその気持ちが今後したいこと・なりたいことへとつながったと考えられる。

さらに、子どもたちは「これからも、強い地震がきてほしくないです」「二度とこんな体験をしたくないです」「今では、家で暮らせるようになったけど、地しんのときのこわかった思いは、今も忘れない」と恐怖を感じ、地震を否定的に捉えていた。しかし一方で、「できるだけ地震に対してすぐ逃げるために何かしておきたい」「これからは机の下にもぐる習慣をつけておきたい」からわかるように、子どもたちなりに、次はどうしたらいいかと前向きな考えに結びついていた。つまり、子どもたちは、困難な体験を自分なりに乗り越えようとする健康的な強さを持っていることが確認されたといえる。つまり、もし地震を体験したとしても、それが直に心の傷に結びつくわけではないことが示せたといえる。

今回の作文のなかには「もし～だったら、～ただただろう」という形式の記述が多かった。《もしちがっていたら》の内容からわかるとおり、子どもたちは今の状況より悪い状況を持ち出し、こうじゃな

かったからよかった、こうであってよかったと思っていた。「もし~だったら、~だっただろう」と考えることは、適応機制の中の知性化と思われる。笠井（1999）によると、適応機制とは、欲求不満や葛藤、不安に直面したときに、心的な平衡状態を維持、回復するために無意識のうちにとるさまざまな心理的手段のことである。そして、知性化とは、割り切れないもの、非合理的なもの、情緒的なものを知的に割り切ろうとすることである（山中・成田,2004）。地震発生後は、子どもたちは大きなストレス状況下に置かれた。その不安を少しでも解消するために、今の状況より悪い状況は無意識に持ち出し比較することによって、心理的に安定を得ようとしたと思われる。そして、少しでも地震に遭ったことを肯定的に捉えようとすることは、前に進もうとする気持ちの表れであると考えられる。

(4) 子どもの心のケアにおいて注意すべき点

子どもたちの活動範囲は日が経つにつれ、広がりを見せていた。子どもたちの活動範囲が広がっていくことは望ましいことだが、一方で注意を要すると思われる。子どもたちは活動範囲が広がることで、様々な状況を目の当たりにする。今までと違う周りの様子を見ることで、二次的な地震のショックを受けることも考えられる。野上・住友・神藤・齊藤・佐藤・吉田・清水・柳原・山本・森田・寺村・坂口・田中（1997）の研究では、児童・生徒にとっては家が半壊であることがPTSD傾向と関連があることを示唆している。

また心のケアというと、普段と様子が違ったり、騒がしい子どもに目が向けられがちである。しかし、一見、おとなしかつたり、ふつうに行動している子どもたちも、いろいろな思いをもって行動しているが、そうした子どもには支援が入りにくいことが多い。藤森ら（1996）は、災害後の一見元気に見える児童の姿に家族や周囲の大人が安心してしまい、注意や関心を払わなくなることに警鐘をならしている。大澤（1999）は子どもたちが周りの大人たちが大変なことを察し、普段のより良い子になろうと努力していることを忘れてはならないし、良い子だからといってその子どもが何の影響も受けていない、と早合点しないことが大切だと指摘している。今回のモデルからもわかるとおり、地震発生時の子どもの動揺はその後の子どもの思考に影響を与えていた。子どもは見た目にはわからなくても、不安の中にある場合がある。すべての子どもたちに目を向ける必要があることがあらためて確認されたといえる。

謝辞

本研究は第9回日本学校心理学会にて発表したものに加筆修正したものである。本調査の実施に際して、貴重な資料を提供していただきました石油化学新聞社、さらに分析において米山沙織さんに多大なる御協力を頂いた。記して御礼申し上げます。

引用文献

藤森和美 1996 子どものトラウマと心のケア 誠信書房。

藤森立男・林春夫・藤森和美 1994 北海道西南沖地震被災者の心理的サポートシステムの構築に関する研究 北海道教育大学紀要（第1部C）,45,139-149.

藤森和美・藤森立男・山本道隆 1996 北海道南西沖地震を体験した子どもの精神健康 精神療法, **22(1)**,30-40.

廣井脩 1995 災害と日本人—巨大地震の社会心理 時事通信社。

笠井仁 1999 適応機制 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司編

- 心理学辞典 pp.608-609.
- 小林朋子 2006 災害発生時における教師と子どもへの支援のあり方について(3)―学校体制の復興とそれに伴う教師の心理について―,日本コミュニティ心理学会第9回大会発表論文集,P89-90.
- 日下菜穂子・中村義行・山田典子・乾原正 1997 災害後の心理的变化と対処方法―阪神・淡路大震災6ヵ月後の調査― 教育心理学研究,45,51-61.
- 野上奈生・住友育世・神藤貴昭・齊藤誠一・佐藤眞子・吉田圭吾・清水民子・柳原利佳子・山本智一・森田英夫・寺村忠司・坂口喜啓・田中孝尚 1997 阪神・淡路大震災の心理的影響に関する研究―第3回調査の報告―,神戸大学発達科学部研究紀要 5,27-34.
- 大澤智子 1999 子どもにとってのトラウマとは 藤森和美編 子どものトラウマと心のケア 誠信書房 pp.40-60.
- Raphael,B. 1989 When disaster strikes beverley radhael. Basic Books,Inc. New York. (石丸正訳 (1989) 災害の襲うとき カタストロフィの精神医学 みすず書房)
- 神藤貴昭・野上奈生・住友育世・齊藤誠一・佐藤眞子・吉田圭吾・柳原利佳子・山本智一・森田英夫・寺村忠司・坂口喜啓・田中孝尚・舛井律子・松田信樹・山口昌澄・二宮奈津子・宅香菜子 1997 阪神・淡路大震災の心理的影響に関する研究 神戸大学発達科学部研究紀要,4,(2),59-73
- 住友育世・野上奈生・齊藤誠一・佐藤眞子・吉田圭吾・清水民子・柳原利佳子・山本智一・森田英夫・寺村忠司・坂口喜啓・田中孝尚・神藤貴昭・舛井律子・松田信樹・山口昌澄・二宮奈津子・宅香菜子 1997 阪神・淡路大震災の心理的影響に関する研究―第1回調査の報告― 神戸大学発達科学部研究紀要,5,15-25.
- 富永良喜 2004 被害者支援における基本的考えについて,臨床心理学,4(6),710-715.
- 山中康裕・成田善弘 2004 精神医学 氏原寛・亀田憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕編 心理学臨床大辞典 培風館 pp.738.
- 山崎晃資・加藤由起子・吉田友子・河合健彦・成田奈津子・渥美真理子・平野浩一 1996 災害と子どものメンタルヘルス 精神療法,22,3-14.